

◦ 5月19日 (火) 掲載

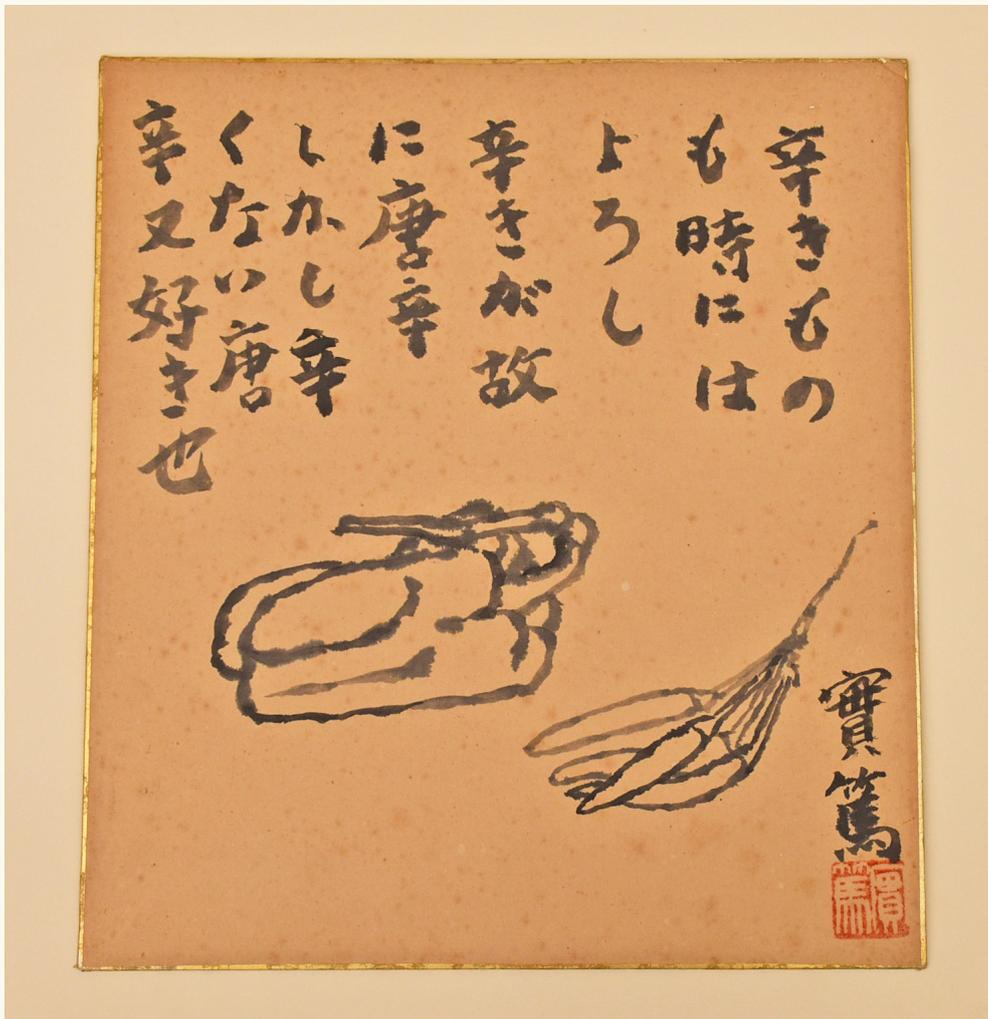
【#おうち時間で実篤を知ろう 食事篇】

実篤をもっと身近に感じてほしい! という思いから、今週は「実篤と食事」についてのお話をお届けします。意外な一面が見えてきたりするかもしれません。

【#おうち時間で実篤を知ろう 73】

食については、「腹がはればいい」という程度の認識だった実篤。お酒も飲まず、珍味や凝った料理も好みませんでした。娘によれば、「くえる」と言われれば褒められていると受け取ってよかったそう。

そんな実篤は、焼いたししとうや、鰹節に山葵を添えてお醤油をかけたもの、小茄子のぬか漬けなどを好んで食べていたとか。この色紙の「辛くない唐辛子」も、ししとうのことでしょう。おうちで過ごす日に、実篤の食卓を再現してみるのはいかがでしょうか。



〈資料情報〉

武者小路実篤 唐辛子  
1955-65年頃 紙本墨画



◦ 5月20日 (水) 掲載

【#おうち時間で実篤を知ろう 74】

野菜の形の美しさに感心し、モチーフとしてよく描いていた実篤ですが、食べるとなるとそれほど箸は進まなかったようです。胡瓜も嫌いで、「胡瓜はギリギリスのたべる物だ」と冗談を言っていました。

佐藤春夫と講演旅行に行った先で胡瓜を出された際、いつもの調子でそう言うと、佐藤春夫は「ギリギリスで結構」という意味の返事をしたそう。実篤は「僕の方の負け」と感心した一方、「佐藤君一寸ギリギリスに似てる気がした」とも書いています。



〈資料情報〉

武者小路実篤 古稀帖

1954年 紙本墨画淡彩

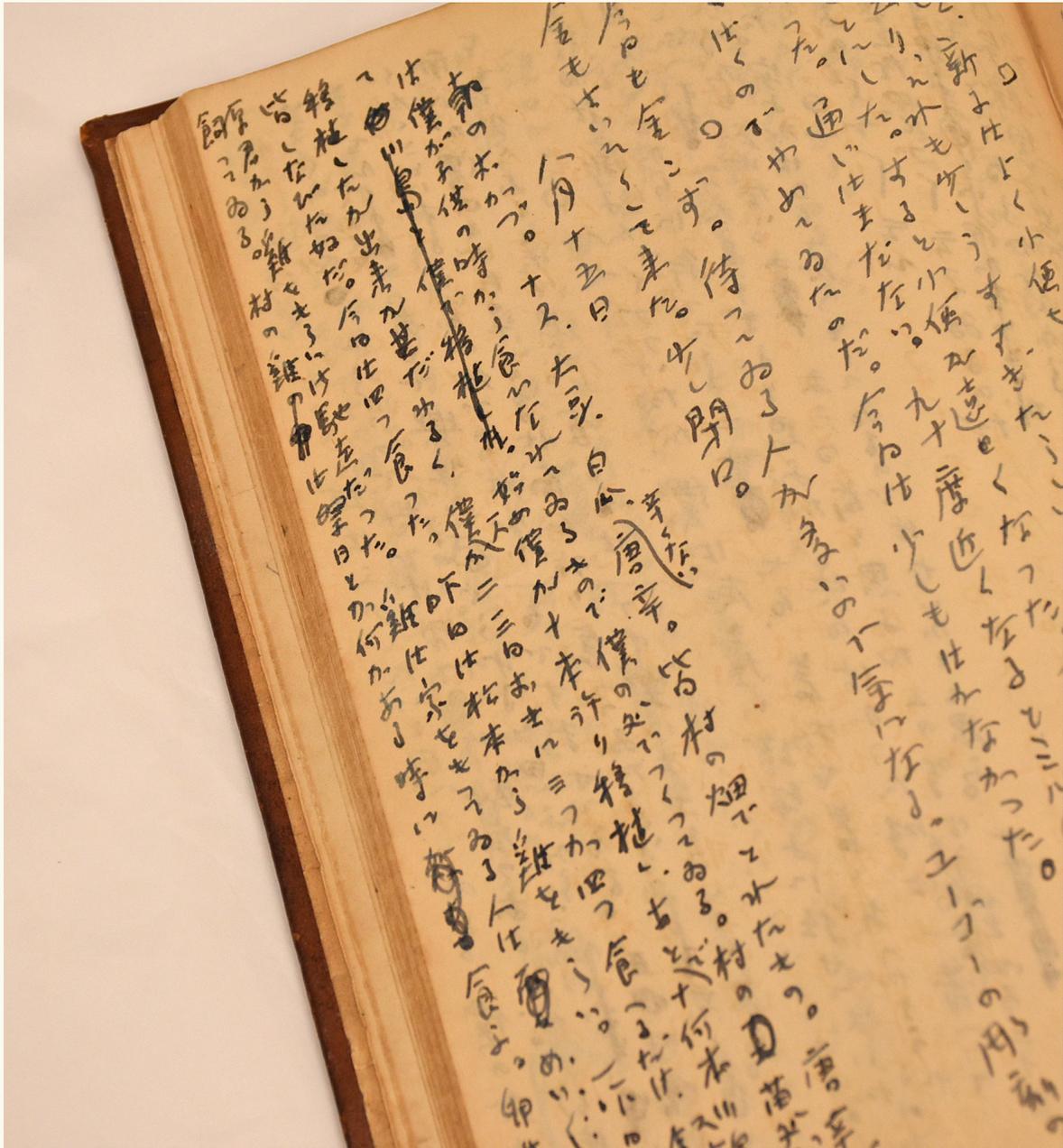


◦ 5月21日 (木) 掲載

【#おうち時間で実篤を知ろう 75】

実篤は33歳の時、誰もが人間らしく生きられる社会を作ろうと、「新しき村」を創設しました。村は宮崎県の山奥にあり、食料確保にとっても苦労しました。当時の日記には、献立が記録されています。

「朝のおかず。ナス、大豆、白瓜、辛くない唐辛子。」全て村の畑でとれたものとありますが、実篤の好物である「辛くない唐辛子」=ししとうは、自分のところで育てていたようです。



〈資料情報〉

武者小路実篤 「気まぐれ日記」原本

大正12(1923)年8月15日



◦ 5月22日 (金) 掲載

---

【#おうち時間で実篤を知ろう 76】

食への関心が低い実篤にも忘れられない味がありました。  
大正時代、新しき村で食料に苦勞していた頃、汽車の食堂で食べたチキンライス。  
一生のうちにこれほどうまいものを食べたことはないと思ったそうです。

よほど美味しさが忘れられなかったのか、後年、娘たちにも思い出話をしました。  
その時「キチンライス」と言い間違えてしまった実篤。  
面白がった娘に「チキンライスに使う赤いの知ってる?」と聞かれ、つかえながらも「チャペッツ」と叫んだとか。  
ケチャップとチャペッツ……確かに語感は似ています。



◦ 5月23日 (土) 掲載

【#おうち時間で実篤を知ろう 77】

このスケッチは、実篤の妻・安子によって描かれた食卓の一コマ。  
実篤は、隣に座る孫のために魚の骨を取ってあげているのでしょうか。  
和やかな食事の様子がうかがえます。



〈資料情報〉

武者小路安子 食卓にて

1944年頃 紙本墨画

実篤はメガネを外し、背中を丸めて魚に顔を近づけ、とても集中している様子。  
一方、口もとを見ると、孫とお話をしているようで楽しそうです。  
安子夫人の温かいまなざしが感じられる描写です。

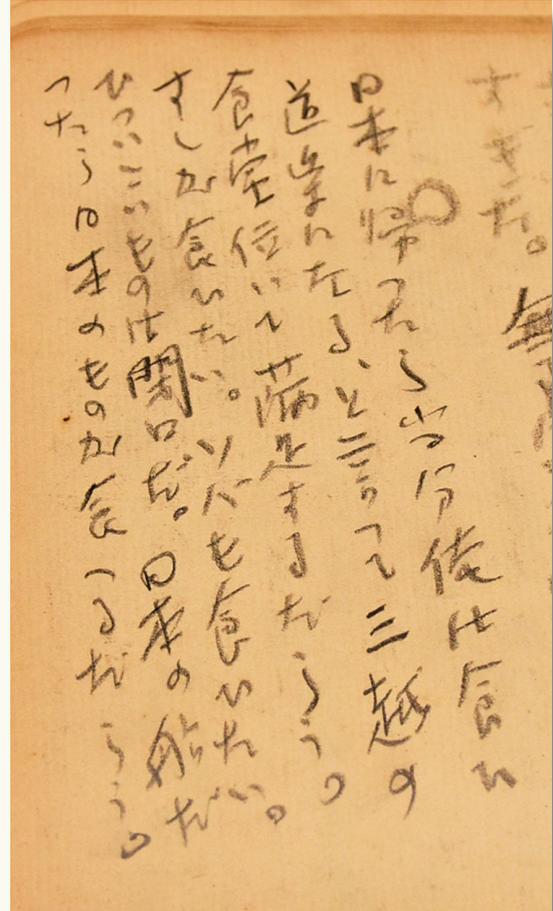
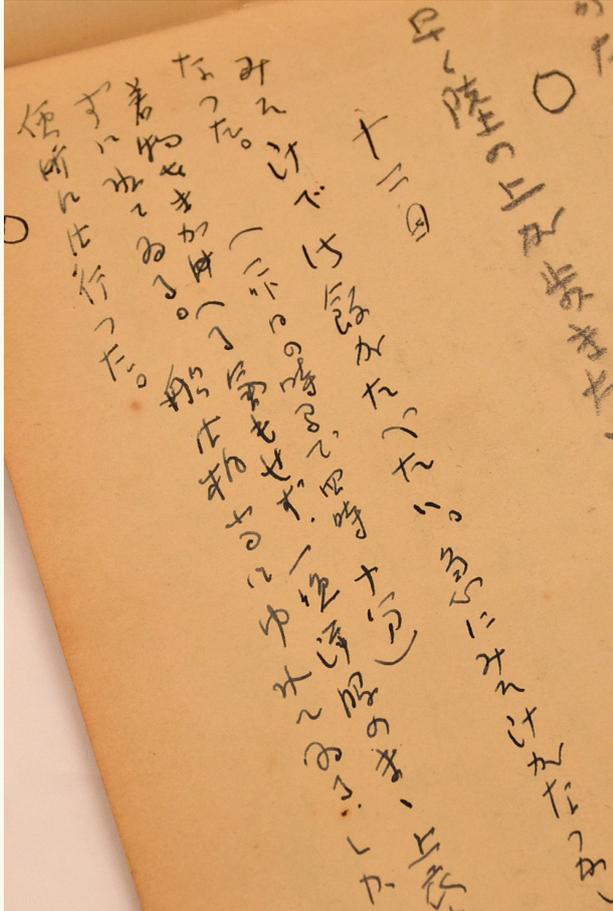


## # おうち時間で実篤を知ろう >> 身近に感じる実篤 (1) 食事篇

◦ 5月24日 (日) 掲載

### 【#おうち時間で実篤を知ろう 78】

実篤は昭和 11(1936)年 4 月末から 12 月まで欧米を旅行しました。船での移動も含め 7ヶ月以上も日本から離れた実篤は、船上でつけた日記に、みそ汁でご飯が食べたい、すしやソバが食べたいと記しています。



#### 〈資料情報〉

武者小路実篤「欧米旅行日記」原本

昭和 11 (1936) 年 5 月 -11 月

異国の地で急に恋しくなる日本の食べ物、いつの時代もそう変わらないのかもしれませんが。

まして、船酔いがひどく、食事もままならなかった実篤のこと。

切実な思いが、文字にもにじんでいるようです。

